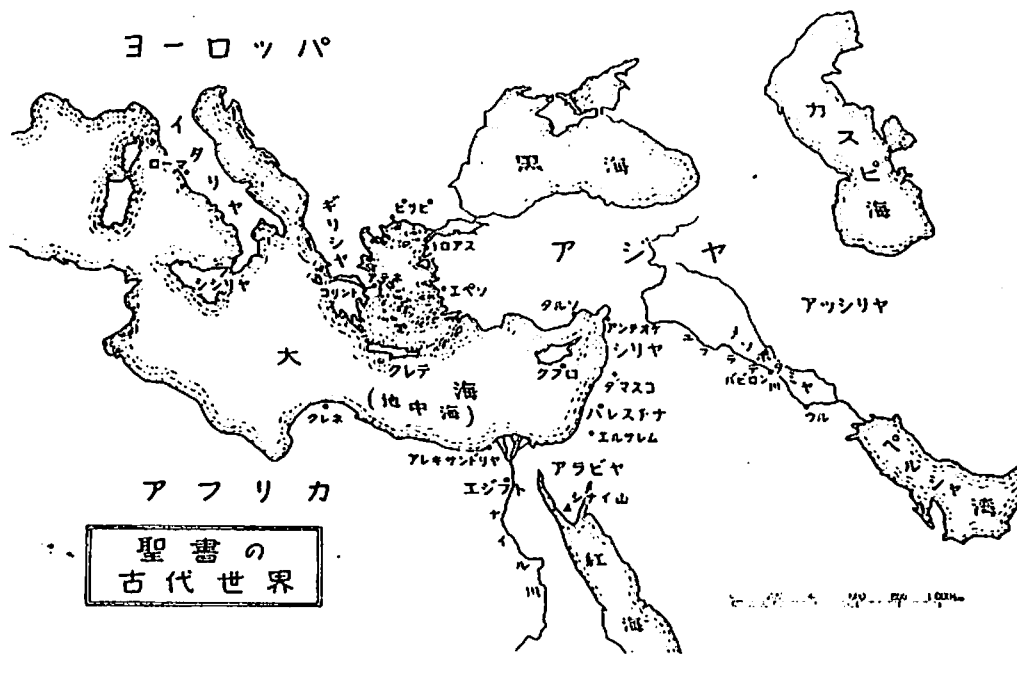


古代ユダヤ教／キリスト教の宇宙観



聖書（旧約聖書，新約聖書）の記述は数世紀にわたっている。

- 1800B.C.頃 アブラハムらの族長時代
- 1275B.C.? モーセによるエジプト脱出
- 1020B.C.
 - ！ 統一王国時代，ダビデ王・ソロモン王
- 922B.C. 南イスラエル王国と北イスラエル王国に分裂
- 850B.C.頃 J文書，南王国にて著作
- 750B.C. E文書，北王国にて著作
- 721B.C. アッシリアによる北王国の滅亡
- 650B.C. J+E文書編集
- 587B.C. バビロニアによる南王国の滅亡
 - ！ (バビロニア捕囚時代)
- 538B.C. ペルシャ起こり，ユダヤ人第1回帰郷
 - ！
- 500B.C. P文書，バビロンで著作

旧約聖書：ユダヤ教，キリスト教，イスラム教の共通の聖典。

紀元前1100年から紀元前150年にかけて，書かれ、改訂再編され続け、最終的にユダヤ教聖典としてまとめられたのは紀元後，118年である。

ユダヤ人は旧約聖書を神の掟（律法）としてとらえる。神とユダヤ人が契約を結び，それが具体的に律法という形で与えられたと信じている。ユダヤ人は，旧約聖書を神の命令，生活の規範として受けとめている。

参考：仏教，ギリシャ文化の勃興もほぼ同時期

新約聖書：イエス・キリストによる全世界を救うべき新しい契約。

イエス・キリストをめぐる文書として，紀元後50年から150年にかけて書かれた。キリスト教は旧約，新約ともに聖典として考えるが，ユダヤ教は新約を全く認めない。キリスト教が旧約聖書を聖典としているのはイエス・キリストを信じるための前提として，つまり新約聖書を理解するという関連性において価値を認めている。

古代ユダヤおよびその周辺地域の歴史と聖書の内容との相関

⇒ユダヤ人の苦難の歴史的事実と周辺民族の経験，思想をユダヤ民族の団結のために宗教的に再構成

古代ユダヤ人の宇宙観（＝聖書の宇宙観）とユダヤ思想の宇宙観を区別すること：

ユダヤ教・原始キリスト教，

＋ヘレニズム文化（ギリシャ哲学）

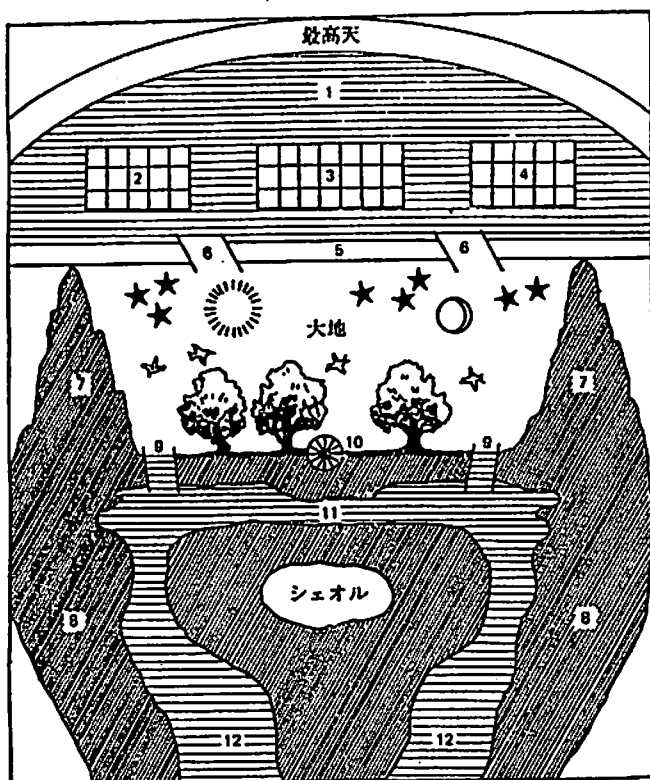
＋アラブ文明

⇒中世キリスト教，ユダヤ思想

3.1 宇宙そのものより神に関心が強かった古代ユダヤ人

ユダヤ人はその歴史を通じて自己の宇宙観をもったことがなかったようである。彼らは彼らが生活をしていた地域の他民族の宇宙観を採用するか承認して、彼らが本来もっていた宗教の目的にそれらを利用した：

ユダヤ人は宇宙の神を考えていたのであって、宇宙そのものを考えていなかった。自然現象に関心はあったが、自然をつくったのは神であり、自然現象によって神の輝きが啓示されることに関心があった。



聖書の世界の概念
(N. M. Sarna, *Understanding Genesis*, New York, 1966)

- | | | |
|------------|---------|-----------|
| 1. 天上の水 | 5. 蒼天 | 9. 深い所の泉 |
| 2. 雪の貯蔵所 | 6. 水門 | 10. 大地のへそ |
| 3. ひょうの貯蔵所 | 7. 空の柱 | 11. 地下の水 |
| 4. 風の部屋 | 8. 大地の柱 | 12. 下界の川 |

3.2 聖書にはUniverse, Cosmosという言葉はなかったこと

3.3 聖書の地球中心的な世界像

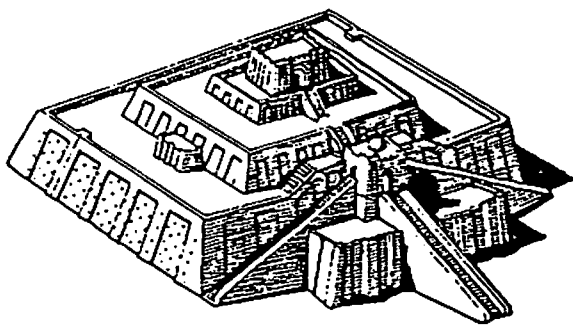
3.4 古代バビロンの宇宙観の継承

宇宙の形は円盤形あるいは四角形？

神話的要素が多い聖書の宇宙観.

「ノアの洪水」のモデルは古代バビロニアの大洪水

「バベルの塔」のモデルとしての古代バビロニアのジクラッド（聖塔）



ウルのジクラッド復元図

3.5旧約聖書における直線的時間の観念

比較：ギリシャ，北欧，中国の宇宙体系における周期的時間の観念

3.6旧約聖書における「(神による)天地創造」の観念 創世記(旧約聖書)

「はじめに神は天と地を創造された。地は形なく、むなしく、闇が淵のおもてにあり、神の霊が水の表に_あり、神の霊。．．」

「天地創造」のテーマとその含意：

1. 「創造性」：絶対唯一、全知全能の創造者によって造り・造られた。

(⇔古代の文化圏での多くの神話的宇宙観に共通の特徴：

「生まれてくる」，「宇宙卵」←背後に、性、生殖が介在)

⇒造られたものは、造ったものの意図や計画を反映しているはず。

神の作品としての自然。

神の意志としての法則，自然法則。

比較：東洋，日本の自然思想

2. 人間の罪(原罪)

神の意志に逆らった結果，人間に罰が与えられた。

神と人間の愛を原動力とした人格関係への背反。

神による創造か，無からの創造か：「創造する」(バーラー)の意味

聖書の記述には無からの創造ということをはっきり述べた箇所はひとつもないということ。「創造する」(バーラー)という語は神の働きについてのみ使われるもので，人間には決して使われない。それは無からの創造という意味を含んではいない。この語の意味は(すでに)存在している物質を「切り分ける」ということ。

すでに存在する材料から何かを創造すること

⇔ 無からの創造

神の知的能力による天地創造という考えはエジプトのメンフィスの創造神プタハの心と舌による天地創造からヒントを得た可能性がある。

3.7 人間中心主義的自然観

万物の霊長としての人間：

被造物の中で、唯ひとつの神の模型としての人間

操作可能な対象としての自然：

人間による自然の操作、支配、征服、収奪

比喩としての「エデンの園」：

エデンの園は、約3-400万年前の伝説的な黄金時代に我々人類の祖先が見たままの地球とそれほど違ってはいないだろう。そのころ人類は他の動植物の間に完全に入り込んでいた。聖書によれば、エデンの園から追放された後、神の罰として、人類は死と激しい労働を宣告され、性の刺激の予防として着衣の習慣と貞節、男性の女性に対する優位、植物の栽培（カイン）、動物の家畜化（アベル）を申し渡され、はては殺人（カインとアベル）までもやらされている。これらのすべての出来事は歴史上および考古学上の事実によく対応している。エデンの園の物語では、楽園追放以前は殺人の行なわれた形跡はまったくでていない。しかし、人間の進化する系統以外の二足歩行の動物の死骸には頭蓋骨には傷がある。このことは、エデンの園においても、我々の祖先は自分に似た動物をたくさん殺したことの証拠になるかもしれない。

（生物学的な記憶を貯蔵する唯一の倉庫としての遺伝情報の暗号。）

3.8 倫理的な一神論

聖書には物語全体として一神論（ヤウハ、ヤーヴェ神）の息吹が通っていること。

一神教という考えは、エジプトの太陽神信仰からヒントを得た可能性がある。

古代オリエント世界は多神教の世界であり、神殿中心の宗教、偶像崇拜の宗教であっ

たが、古代ユダヤの預言者たちは、宗教の精神面を強調し、偶像を否定し、それによってオリエンティックな民族神ヤウハを、生ける倫理的唯一神の地位に高めた。

⇒世界宗教としてのキリスト教

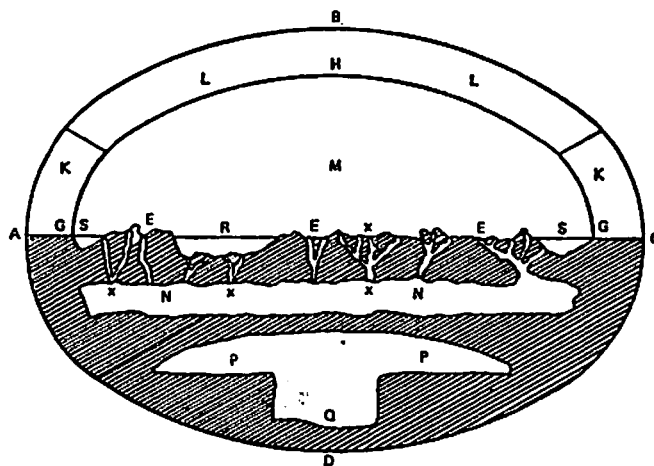
ラビ文献には宇宙の起源や人間の経験を超越した宇宙の事物については空想を抑えようとする強い制止がある。恐らくこれは、それらからでる可能性のある異端の考え、とくに二元論的見解を恐れた為であろう。

3.9 (補) 中世ユダヤ (ユダヤ思想) の宇宙観

中世ユダヤの宇宙観＝アラブの衣を着たギリシャの宇宙観

「無からの創造」という観念を取り込み、ユダヤの信仰の要石とした。

図：ユダヤの宇宙

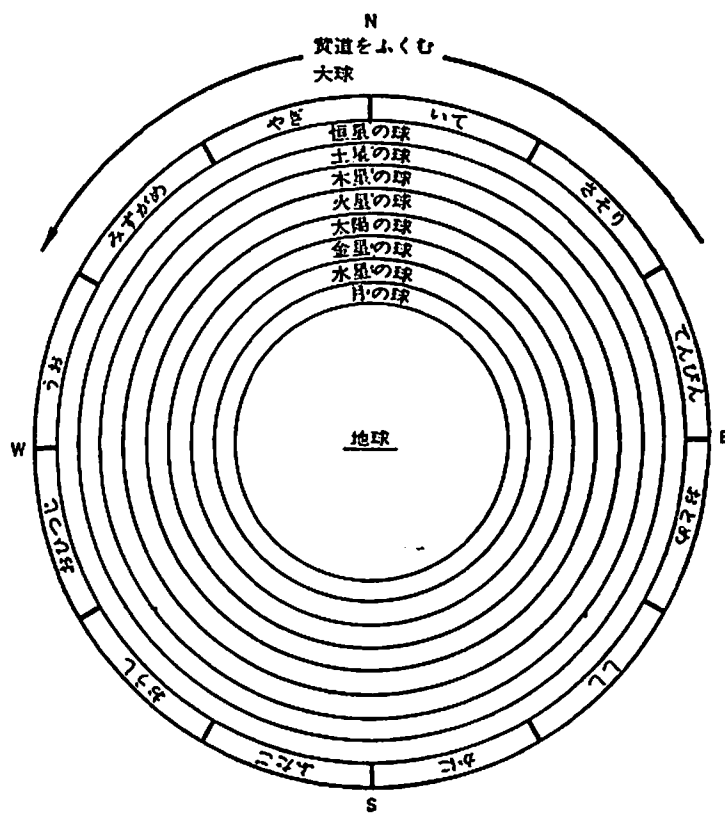


ユダヤの宇宙

(W. F. Warren, *The Earliest Cosmologies*, New York, 1909)

ABC	上天	GHG	天の断面	NN	下界の水
ADC	下界	KK	風の貯蔵所	xxx	泉
AEC	地と海の面	LL	上界の水・雪・	PP	シェオル
SRS	海		ひょうの貯蔵所	Q	シェオルの底、
EEE	陸	M	空気のある場所		インフェルノ

図：マイモニデスの宇宙（12世紀）



マイモニデスの宇宙

参考文献：

- C.ブラックカー, M.ローウェー, 「古代の宇宙観」 (海鳴社, 1989年)
- S.A.アレーニウス「宇宙の始まり」 (第三書館, 1992年)
- 織田武雄「地図の歴史－世界編」 (講談社現代新書, 1974年)
- 桜井邦明「天文考古学入門」 (講談社現代新書, 1982年)
- 貝塚茂樹編「世界の歴史1」 (中央公論社, 1974年)
- 旧約聖書, 新約聖書
- 新井 智「聖書－その歴史的事実」 (日本放送出版協会, 1976年)
- 関谷定夫「図説：旧約聖書の考古学」 (ヨルダン社, 1979年)
- 村上陽一郎「改訂版 宇宙像の変遷」 (日本放送出版協会, 1991年)
- C.セーガン「エデンの恐竜－知能の源流をたずねて－」 (秀潤社, 1978年)